

佐佐木先生と共に20年

宮本 健（化学教室）

佐佐木行美先生がああ若々しきで御退官になる。まさに光陰矢の如しである。

初めて先生にお会したのは筆者が学部3年の学生のころで無機化学Ⅱの講義であった。当時先生は御結婚直後で、薬指にはめた指輪が気になるのか、机の上に置いてみたり、また指にはめてみたりしながら、周到に用意された講義用ノートをパラパラめくられ、例の早口で講義を進められた。我々学生は指輪が気になるのと、板書した文字を先生が直ちに消してしまうので、ノートをとるのに本当に四苦八苦した。講義でのお話（たしか種々の溶媒での酸と塩基の定義であった）は面白く、無機化学はこんなにも系統的で美しい学問なのかという誤解と感慨を我々学生に与えた。これが正真正銘の純化学者、佐佐木行美先生に対する最初の鮮烈な印象であった。

その後、先生の研究室で卒業研究、大学院修士課程とお世話になり、どういう御縁か研究室の助手・助教授を勤め21年間も苦楽を共にすることになった訳です。

先生は30年間一貫して、ポリ酸陰イオン（無機縮合酸イオン）の溶液化学、構造化学の研究を着実に進められました。その哲学的背景となったのは何だったのでしょうか？御自身の執筆された「化学総説13 八面体の配位立体化学」（日本化学会編、昭和51年刊）の中で仏教哲学書「阿毘達磨具舍論」を引用され、次のように述べています。「書の中には、時間の単位として“却”から“刹那”迄の定義や 1.28×10^9 年の周期で発生と消

滅を繰返す宇宙の雄大な記述等多くの自然哲学が含まれているが、今我々の興味を引くのは一種の八面体とみなせる分子モデルである。位置があって大きさのない“極微”=原子の一つが、上下前後左右同様な原子に囲まれて一つの大きな原子となり、この新しい単位は7個集まって一つ上の段階の単位となる。このように“分子”の様なものは 7^n 個の極微を含み、巨大なものに成長して行く……」。この比喻の正確な理解は、到底筆者には不可能ですが、古今東西の文化・歴史に通暁されていらっしゃる先生のことですから、自然科学成立過程の礎である博物学を背景として、ポリ酸の基礎研究を無機合成化学として推進、開花させようとお考えになったのだと推察しています。しかし現在の日本での自然科学基礎研究に対する環境はまことにきびしく、先生の夢は完全に実現されたとは言い得ませんが、教えを受けた門弟達はその理想を実現し、一層発展させることを期待しています。

最後に一言。佐佐木先生を語るに女性を抜きにしては考えられません。先生は日頃から学生に対して強い個性の矜持と弱い立場にいる人達への同情の気持ちを忘れないようにと指導されていました。そのせいか佐佐木研究室には、続々と有能な女子学生が集まり、一時は「佐佐木女学院」と称されるほどでありました。その後研究室出身の女性研究者が先生の御尽力のかいあって、すくすくと育ち、化学界では「女性学者の育成者」としても御高名です。昔から先生は多くの良き女友達に

も恵まれ広い交遊関係をお持ちになっていることは、筆者にとっても羨ましい限りでありました。どうか行美先生、御退官後は女性だけでなく、立

場の弱い若い優秀な男性研究者達も周囲に数多くいることをお忘れなくお考えいただき、今後共よろしく御指導のほどお願い申し上げます。